

〔論文〕

保育活動での音楽による社会性の育ち

—保育雑誌に掲載された指導計画の分析から—

茂野 仁美
Hitomi Shigeno

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

音楽活動は子どもにとって単に歌ったり踊ったりして表現するだけのものではなく、身体運動の積極的なコントロールに寄与し、さらにその反応によって他者との関係性の発展を引き出すものであることが、近年、多くの研究から明らかにされてきた。本研究では、保育雑誌に掲載の「指導計画」から音楽活動に注目し、「音楽に関わる活動」として提案されている内容や想定される子どもの姿を抽出し、他者との関係がみられる活動の内容について考察した。

乳児期から幼児期前半では、保育者が音楽活動を提供しているが、それに対する子どもからの反応と保育者の双方のやりとりとなって、他児との関係へとつながっていく。幼児期後半では、音楽活動は仲間で共有され、一緒に行くものとして発展していき、「互いの思いに気付き合う」ことや「友だちの良さに気付く」ことが育まれる。したがって、保育者の働きかけは直接的なものから、間接的な環境構成や援助へと変化していく。指導計画の内容からは、子どもの社会性は保育者に依存したものから自分たちで楽しむものへと広がっていくことを読み取ることができた。

キーワード：音楽活動、社会性の育ち、乳幼児、保育、指導計画

1. 問題と目的

1. 本研究の目的

子どもにとっての音楽活動^{注1)}とは、単に歌ったり踊ったりして表現するだけのものではなく、人間の文化の一つである「音楽」による他者からの働きかけが乳幼児にリズムを与え、身体運動の積極的なコントロールに寄与し、さらにその反応によって他者との関係性の発展を引き出す活動である。そして、子どもの音楽理解が発達し、生理的、生得的に持つリズム同期の能力が、様々な要因によって補強され、後天的に学習が繰り返されることによって、他者との関係性が発達していくことが保育や育児の中で起こっていることを茂野（2019）は指摘した。

乳幼児と養育に関わる大人との間の音楽が、乳幼児の社会性の育ちへ大きく関与することは、保育者にとっても子どもとの関わりを理解する上で重要なことである。保育者は、子どもの社会性の育ちの知識を持ち、適切に働きかけることが求められる。その点から鑑みて、音楽やリズム遊びでの同期による社会性の育ちへの寄与に関する知見が、保育に生かされなければならない。

本研究においては、保育における音楽活動や指導方法と、子どもの社会性の育ちの関連を保育雑誌に掲載されている「指導計画」から年齢別に明らかにすることを目

的とする。そこで、第一に指導計画の中では、音楽に関わる活動としてどのような内容が提案され、子どもの姿を想定しているかについて明らかにする。第二に、他者との関係がみられる音楽活動と、その内容が各年齢の1年間を通して、どのような流れをもって記載され、扱われているかについて明らかにする。

まず、近年のリズム同期と向社会性の発達に関する先行研究を概観する。

2. 音楽活動による向社会性の発達に関する研究動向

乳幼児にとって、音楽は演奏したり鑑賞したりするだけのものではない。下記に述べるように近年の研究において、大人と子どもの間で音楽やリズム遊びでの同期を経験することが、向社会性の発達に関わるということが明らかにされてきている。Kirschner（2008）は、社会的文脈の中で刺激が提示された場合、子どもは早い時期から、より正確に身体の動きを自発的に刺激のリズムに同期させることができるという仮説のもと、実験を行っている。社会的パートナーによるリズム打ち、機械によるリズム打ち、録音されたリズム打ちのいずれかと一緒に太鼓をたたく実験で、社会的パートナーと一緒にいる場合、2歳半の子どもは、自発的な運動のテンポではない拍子に合わせて、太鼓をたたくテンポを調整することができたという。さらに、いずれの年齢の子どもも社会的な関係

において、より正確に太鼓のリズム打ちに同期ができることを明らかにしている。社会的パートナーと一緒に太鼓をたたくことで、共に行動する課題の共有化が図られ、一緒にリズムを合わせようとする人間特有の動機づけが引き出されると結論付けている。Cirelli (2014) は、14か月の幼児が、実験者とともに音楽によるリズムカルな同期を経験した場合、同じ場所にいた同期を共に体験していない人に対してよりも、リズムカルな同期を共に体験した実験者に対して、手伝いなどの向社会的な行動が見られたと報告している。それは、子どもの性格傾向とは関係なく見られたという。Cirelli (2018) のその後の実験結果においても、乳児にとってなじみのある歌を歌い、同期して一緒に動く人は、自分にとって社会的な関係を示す人だと理解する可能性があり、リズムやメロディのある音楽でやり取りすることは、社会的な関わりを強くするものだと主張している。乳児に対する音楽的な関わりは社会的であり、養育者が乳児を抱き、なじみのある歌を歌いながらやさしく揺さぶるなどマルチモーダルな様式で行われる。それは、乳児に対して、感覚的、社会的、感情的な情報を複合的に伝えるものである。このような行動は、単に受動的に録音された音楽を聴くことよりも乳児に大きな影響を与える可能性があり、養育者と乳児の音楽的相互作用は、彼らの結びつきを向上させ、これから先の音楽的関わりは社会的、認知的に重要な背景となるだろうと結論付けている。

音楽的相互作用による結びつきは、乳幼児と養育者の関係だけではない。Trehub (2019) は、保育者などのプライマリーケアワーカーに焦点を当て、乳幼児主導の動きを伴う一对一の歌唱や、視覚的なジェスチャーを伴う歌唱は、音響的にも視覚的にも単独の歌唱とは異なり、乳幼児の興味をひきつけ、気分や目覚めを調整するのに効果的であること、保育者の歌の反復性や同一性は、記憶と二者間でやりとりする意義に寄与していること、保育者の歌唱は乳幼児の社会的関与にも影響を与えていて、乳児の歌は社会的相互作用と、感情の自己調節において重要な役割を果たすことを明らかにしている。

次に、音楽活動による乳幼児の社会性の育ちへの寄与に関する知見とは別に、保育の中での子どもの姿はどのように捉えられているのか。子どもの他者との関わりを含めた、保育実践における音楽活動について概観する。

3. 保育の中の音楽

保育の場面における音楽活動は、単に演奏の上達を目指して取り入れられているものではない。生活発表会や地域との交流で、歌や合奏を披露するために練習することもあるが、園生活の中で子ども達は、あいさつや生活

習慣に関わる歌を日々繰り返し歌い、朝や帰りの集まりでは季節の歌や、空想の物語の歌、何かになりきったり見立てたりする手遊び歌などの音楽にふれている。また、園庭や遊戯室で音楽を伴った体操やダンスもすれば、活動の区切りの合図が音楽である園もある。園生活では様々な音楽にふれるのである。あいさつの歌や生活習慣に関わる歌は、0歳から就学前の年長児まですべての年齢で共通であることが多い。また、異年齢交流で行う手遊び歌は、年長児が年下の子どもに披露するだけでなく、一緒に遊ぶことのできる歌が取り上げられる。加えて、他の年齢のクラスの歌う歌や手遊びは、園内の環境の音として存在する。年長児が取り組んでいる歌や合奏、体操やダンスの音楽は、時に年少の子ども達には憧れのものとなり、その姿を模倣することや憧れていた子ども達自身が、進級すれば自分達が取り組む番になるという期待を生むものとして存在することもあるだろう。保育での音楽活動とは、領域「表現」のねらいを達成するために行われる活動だけではなく生活リズムの一部の活動や、日常の環境音として存在し、多くの場面に関わっている。さらに、園生活では多くの対人関係も経験する。保育者が乳児に歌いかけることや、幼児同士の2人組での手遊び歌、合奏や歌をみんなで合わせることは他者との関わりが生じており、意識されるかどうかにかかわらず、保育の中の音楽活動は社会性の育ちにも働きかけていることになる。

以上のことは、保育実践や保育観察の事例から研究がなされている。前田 (2004) は年長児クラスでの実践事例から、子どもの創造的な音楽表現の意味についての見解を提示しており、創造的な音楽表現とは、「構造」と「流動」の最中に、「形態」としての「音楽」を作り出すことと述べている。そして、子どもと保育者が共に作り上げてゆく過程の中にこそ、創造的な音楽表現の「意味」が生じるのであり、それが、ひいては音楽教育、そして保育全般にとって重要な意義を持つと結論付けている。また、白石 (2006) は音楽活動を行っている乳幼児の姿を、見て取る視点について考察を行っている。音楽の機能を「1. 音楽は組織化された時間を作り出す」「2. 音楽は人の心に働きかける」「3. 音楽は身体に関わる」「4. 音楽はコミュニケーションの方法にもなる」の4つにまとめ、これらの乳幼児の音楽的活動の中での現れ方を検討し、次の3つの視点「1. 運動との関係」「2. 認識・表現との関係」「3. コミュニケーションとの関係」を導き出している。乳幼児の個人内に対して音楽が働きかけていることと同時に、コミュニケーションという社会性において繰り返される作用について言及しているといえる。音が連続で聴こえてくるというだけ

ではない、人間の文化の中で意味を持つ音楽を感じることは、子ども自身だけでできるものではなく、他者との関わりの中で得られるものである。小池(2009)によると、身体的な音楽表現が豊かな保育者が、幼児の前で創造的な表現を見せるなら、幼児はその表現に影響されて、より一層想像的で豊かな表現をするようになるだろうと述べている。これも、保育者という他者との関わり存在によって、子どもの表現がより促されているととらえることができ、社会性の育ちへの寄与だと考えられる。

保育の中での音楽の指導方法が、子どもの社会性の育ちに影響を与えることの多くの研究から明らかにされている。山下・虫明(2019)は、幼児への歌唱指導中に幼児から発せられた声や反応が周りの幼児にも影響し、歌の活動が活発になった事例をあげ、幼児の理解の速さや感受性の深さが明らかになったとし、指導内容とそれに対する幼児の反応を詳細に記録することで、改善すべき点が浮かび上がると述べている。幼児からの声や反応が周囲の幼児に影響を及ぼすということは、他者と関係しあっているからこそ、指導方法と共に社会性の育ちの姿として注目すべき点への指摘だと解釈することもできる。岡田(2019)は、自身の行った4歳児を対象としたリズム活動の事例と担任保育者の保育指導計画や保育指導案の検証において、子どもの生き生きと活動する姿や、音楽の速度や強弱の変化に対してどんな変化が起きるのか、仲間と顔を見合わせて微笑みながら期待感を持つ姿が散見されたことから、子どもは音楽遊びから「聞く」から「聴く」へ、また「聞き分ける」へ「聞く力」が著しく成長したのではないかと推察されると報告している。音楽遊びは音楽性の向上や表現力の向上のみならず、子どもの生活を支え、豊かに生きる力を育てる側面があること、またこの力は学びに向かう力に通ずるものと推察している。仲間とともに「聞いた」音に対して期待感を持つということは、音楽を通した子ども同士の関係性が結ばれているのである。「聞く力」の育ちということにも大きな意味がうかがえる。

では、保育者の音楽活動のとらえ方や考え方はどのようなものか。伊藤(2019)は保育者に対するリズム遊び・音楽遊びの研修における参加者の自由記述の回答から、現場の保育者の「リズム遊び」のとらえ方、音楽表現活動に対するイメージの変容について検討している。研修前は参加者にリズム遊びへの苦手意識がある、歌や楽器の技術の習得のための導入活動ととらえている、音楽経験があっても保育実践とは乖離しているなどのケースが見られ、「リズム遊び」が単独の活動として取り扱われたり、ある一定のレベルを保持した音楽力によっ

て展開されるべき“特別な活動”とされたりするような保育者の認識が危惧されると述べている。ただし、研修後は、日頃の保育の営みの中に“リズム”が内在されていることを再認識した記述が見受けられたという。若谷(2018)は、保育で用いられる手遊び歌について、現場の保育者がどのように考え、用いているかの意識調査の結果から、「手遊びは子供たちの成長に良い影響を与えるものとして考えている」「手遊びを教えることは楽しい」という考えが高ポイントである一方、保育者によっては手遊びを「絵本の読み聞かせや活動の前の子供たちを落ち着かせるために使う道具」ととらえていることが多いことも報告しており、保育者の意識の違いが感じられる結果だとしている。「保育活動前の導入」としての手遊びということは、笠井ら(2015)のアンケート調査でも、多くの保育者が回答したと報告され、活動をスムーズに進められる手段として必要ではあるが、歌うこと・音楽を楽しむという意識がまず大切であると思われると述べている。これら保育者への調査からは、音楽活動は楽しい活動だが、苦手意識を伴うことや、手遊び歌は「保育活動前の導入として」の道具となっている実態がみられるという。

では、生理的・生得的に持つリズム同期の能力や、保育の中の音楽活動を通してみられる他者との関わりなど、音楽活動によって引き出され育っていく子どもの能力について明らかにされている一方で、保育者もつ音楽活動に対する苦手意識や保育活動前の導入の一つという実態において、音楽活動を通して何を子どもたちに体験してほしいのかということに言及した保育は行えているのだろうか。保育を行うにあたっては、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型こども園教育・保育要領」に基づき、指導計画が作成されることが前提であるが、指導計画において音楽活動がどのようにあつかわれているのかについて、次に概観する。指導計画を分析することによって、保育での音楽活動から得られる体験の意味を理解する手助けとなる可能性があり、保育の質を高めることに結びつくと考えられる。

4. 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に記載されている音楽活動と社会性

保育の指導計画作成にあたっては、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第2章に示されているねらいや内容に基づいて、達成されるように計画することが必要である。ここでは、幼稚園での教育と、保育所での養護の側面の双方を併せ持つ「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(2017)から音楽に関わる活動に関する活動と、社会性

の育ちに関わる活動について明らかにする。

保育での音楽活動、社会性の育ちの側面についての取り扱いは、領域「表現」と「人間関係」が該当する。ねらい及び内容はそれぞれの年齢での発達の特徴をふまえて、乳児期では身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちを通じ合う」及び精神的発達に関する視点、「身近なものに関わり、感性が育つ」という3つの視点にまとめられている。また、満1歳以上では、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言語の獲得に関する領域「言葉」、及び感性と表現に関する領域「表現」の5つの領域にまとめられている。

まず、乳児期に関しては「基本的事項」のなかで、「特定の大人との応答的な関わり」や「情緒的な絆」の形成という用語が見られ、発達の特徴をふまえた愛情豊かな保育の必要性が述べられている。このことをふまえた先の3つの視点のうち音楽に関わる内容は2つ記載されている。「身近な人と気持ちを通じ合う」という視点における「保育教諭等による語り掛けや歌いかけ、発声、喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ」という記載と、「身近なものに関わり感性が育つ」という視点における「保育教諭等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や身体を動かして楽しんだりする」という記載である。つまり歌いかけ、歌やリズムは保育者との応答的な関わりを媒介するものとして位置づけられているといえるであろう。さらに内容の取扱いでは「乳児期においては、表情、発声、体の動きなどで、感情を表現することが多いことから、これらの表現をしようとする意欲を積極的に受け止めて、園児が様々な活動を楽しむことを通して表現が豊かになるようにすること」とある。これらにある、語りかけや歌いかけ、あやし遊びは一人ひとりに応じて、乳児と保育者、個別の関係で行われることである。内容や内容の取扱いで記載されている事柄と乳児と保育者間での個別の関わりは、「教育及び保育の実施に関する配慮事項」において、「一人一人の園児の生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育教諭等が応答的に関わるように努めること」と記載されている部分に通じていく。

一方、乳児保育以降では、音楽活動について明確に記載される領域は「表現」である。「1歳以上3歳未満の園児の保育に関わるねらい及び内容」の「表現」の内容では「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」とある。「3歳以上の園児の教育・保

育に関するねらい及び内容」では「表現」の内容で「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」とあり、特に生理的・生得的に持つリズム同期の能力による行動や他者との関係性に触れた記述は見られない。発達に応じて保育者との関係から保育者を仲立ちとした友だちとの関係への発展、そして仲間の一員という感覚が子どもに生じていき、個の成長と集団の活動の発展を図ることが前提となっているととらえることができる。生理的・生得的に持つリズム同期の能力での反応を経て、自らで音楽を探索しはじめることと、養育者・保育者等の相互的な関わりを繰り返すにより、文化的な音楽としての音楽理解が進んでいく段階（茂野，2019）ということとの関連が考えられるだろう。では、乳児期以降の領域「人間関係」のねらいはどのようなものか。「1歳以上3歳未満の園児の保育に関わるねらい及び内容」の「人間関係」のねらいでは「幼保連携型認定こども園での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる」、「周囲の園児等への興味関心が高まり関わりをもとうとする」、「幼保連携型認定こども園の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く」とされている。その内容では、保育教諭からの受容的・応答的な関わりを基軸として、周囲との関係を広げ、遊びの模倣や、ごっこ遊びを楽しむこと、遊びや生活の中で様々なきまりにふれることが挙げられている。そして、3歳以上の領域「人間関係」は「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て人とかかわる力を養う」ことが大きく掲げられている。ねらいにおいては「幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう」、「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」、「社会生活における望ましい習慣や態度を身につける」と記載されている。より周囲との関係性が広がり、遊びが模倣から共有するものへと発展し、この中で対人関係を通して社会生活での望ましい習慣に触れる体験をすることだとまとめることができる。この体験の一端に、保育の場で行われている、あいさつや生活習慣に関わる歌や季節や空想物語の歌、手遊び歌、音楽を伴った体操やダンスなどの音楽活動も含まれると言える。

5. 方法

(1) 保育雑誌に掲載されている指導計画

指導計画は長期的な発達を見通した年間、学期、月間、これと関連して週や日ごとで計画が作成される。指導計画に基づいて適切な指導が行われていく。このような指導計画を作成するモデルとして、保育雑誌には年間

や月間の指導計画案が掲載されている。

本研究では、その中から代表的な2つの保育雑誌の1年分の月間指導計画を対象として検討する。2つの保育雑誌は、現在発行されている保育雑誌の中で創刊の古いもので、流通量もあり、多くの保育施設で購読されていることが考えられることから対象とした。

2誌の記載方法は多様で、指導計画を作成したグループや園によって書式の異なりがみられる。また、項目の名称において「保育士の配慮・援助」とされていたり「援助と配慮」とされていたりするなどの違いがあったり、領域ごとの記載のないものがあったり、期の分け方によらつきがあったりした。しかし、指導計画作成において、多くの園で少なからず参考にされていて、近年では雑誌だけでなく、インターネットでユーザー登録をすると、無料で指導計画をダウンロードできるサービスもあり、情報へのニーズは明らかである。

以下に本研究において保育雑誌掲載の指導計画について、筆者の分類、分析方法を述べる。

(2) 保育雑誌の月間指導計画の分類方法

①対象とした雑誌

a. 保育雑誌 A (小嶋, 2019)、

2018年度に月刊誌で連載されていた指導計画をまとめ、2019年度に増刊号として発行された、0、1、2歳児対象の月間指導計画及び3、4、5歳児対象の月間指導計画。

b. 保育雑誌 B (月刊保育とカリキュラム編集委員, 2019, 2020)、

2019年度に月刊発行された0～5歳児の月間指導計画。

2019年度に発行されたものを用いたのは、2017年告示、2018年施行の「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が反映された指導計画となっているからで、また1年分としたのは、新年度の始まる4月から年度末の3月までの年間を通してそれぞれの年齢の月間指導計画を俯瞰するためである。

なお、保育雑誌 B の月間指導計画については3歳児のみ、一部が幼稚園用と保育所用の2種類の掲載であった。いずれの指導計画も実際の園や保育者らが組織する研究会の実践をもとに作成されたものである。

②音楽にかかわる語の抽出

調査対象雑誌の指導計画から、音楽に関わる語を抽出した。音楽に関わる語としては、以下のように「音楽」だけにとどまらず音楽の諸要素を含んだ活動を含めた。

音楽、リズム、リズム遊び、メロディー、歌、歌(う)、わらべうた、手遊び歌、楽器、(体操)曲、ダンス、踊(る)

③分類の方法

月間指導計画の月ごとの「ねらい」と保育の内容のうち上記の「音楽に関わる語」を含めた音楽に関わる内容の記述に対して、「環境構成」、「保育者の関わり・配慮」などに記載されている内容を抽出した。また、保育の内容は音楽ではないが、「環境構成」や「保育者の関わり・配慮」の中で、上記に示した「音楽に関わる語」が出てくるものについても、同様に抽出の対象とした。さらに「保育者の簡単なことばがけで動作をまねしてふれあいあそびを楽しむ」「友だちと一緒に歌ったり、音楽に合わせてからだを動かしたり、表現したりする」のように、保育者のまねをすることや、友だちと一緒にまた異年齢児といっしょにというような、他者との関係について特に触れられていると考えられる記載について注目し、それらの抽出を行った。

II. 保育雑誌の月間指導計画の分析の結果と考察

1. 「音楽に関わる活動」の掲載頻度

指導計画の記載方法は、保育雑誌 A では年齢に応じ、乳児においては「3つの視点」からと、1歳以上においては「領域」ごとに「内容」、「環境構成」、「保育者の関わり・配慮」や「保育士の配慮・援助」などの項目名とされていた。保育雑誌 B では領域は明記されておらず、0～2歳児用の指導計画が「今月初めの子どもの姿」「ねらい」「内容」「環境づくり(◆)と援助・配慮(○) (記載は同じ欄で、文の先頭に◆や○の記号で分類が示されている)」、3～5歳児用の指導計画が「前月末の幼児の姿」「ねらい」「幼児の経験する内容」「環境の構成と保育者の援助」の項目名で記載されていた。ねらいは一つ一つの内容に対応して書かれていた。0～2歳児までは指導計画をもとに保育の展開の例として、挿絵でも「内容」や「配慮」について表されている。0歳児の指導計画は、個々の月齢の違う子どもを想定して、一人ひとりに対しての計画が記載されていた。また、3歳児の指導計画では7月までは幼稚園(認定こども園)用と、保育園(認定こども園)用の2種類があった。それ以降は幼稚園、保育園、認定こども園の共通となっていた。保育雑誌 A では「内容」「環境構成」と「保育士の配慮・援助」であるのに対し、保育雑誌 B では「幼児の経験する内容」「環境構成と保育者の援助」であるが、それらは同義であると考えられることができる。本論文においては、「内容」から抽出した「音楽に関わる内

容」以下について、「環境構成」「援助と配慮」で統一して表記した。その他、備考として保育雑誌Aについては、「3つの視点」と「領域」を、保育雑誌Bについては「ねらい」を抽出して示した。

「内容」からの抽出の結果は、「音楽に関わる内容」については、保育雑誌A、保育雑誌B共にすべての月に含

まれているわけではなかった。特に、保育雑誌Aの3歳児の「音楽に関わる内容」は12ヶ月中の5ヶ月分だった。表1に記載のあった月数と、特に他者との関係について触れられていると考えられた記載があった月数をまとめた。

表1 保育雑誌の月間指導計画掲載の頻度と「他者との関係がみられる記載」の頻度

		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
保育雑誌A	掲載月数	9	7	8	5	11	12
	他者との関係が見られる記載	9	5	3	3	8	9
保育雑誌B	掲載月数	7	9	10	10	8	6
	他者との関係が見られる記載	7	7	7	5	7	4

2. 年齢ごとの指導計画の分析

①0歳児の指導計画

0歳児の「他者との関係がみられる記載」について保育雑誌Aを表2、保育雑誌Bを表3に示した。

表2 保育雑誌A 0歳児の他者との関係がみられる記載内容

月間	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
4月	保育者や友だちと、歌やふれあい遊びを楽しむ。	親しみやすい歌を用意し、ふれあい遊びの時間を設ける。	ふれあい遊びを楽しむ中で、わらべうたや手遊びに親しみが持てるようにする
5月	歌や手遊びをしてもらったり、歌に合わせて体を揺らしたり、手遊びを動かしたりすることを楽しむ。		歌を歌ったり手遊びを一緒に楽しみながら、表情豊かに気持ちを共感できるようにする。
6月	絵本を読んでもらったり、保育者と手遊びをしたり、保育者のまねをしたりして、ことば遊びを楽しむ。	月齢や季節に合った、絵本や手遊びを通して応答的に関わる。	親しみやすいわらべうたなどを取り入れながら、一人ひとりの気持ちによりそっていく。
7月	わらべうたを歌ってもらったり、絵本を読んでもらったりして、保育者とかかわりを楽しむ。		子どもとのスキンシップを大切に、ゆったりとした雰囲気の中でわらべうたを歌ったり、ふれあい遊びを楽しんだりできるようにする。
8月	保育者の簡単なことばがけや動作をまねして、ふれあい遊びを楽しむ。	親しみやすいわらべうたなどを取り入れながら、ふれあい遊びが楽しめるようにする。 絵本の読み聞かせを楽しんだり、手遊びなどを繰り返し行ったりして、まねできるようにする。	言葉と動作が結び付くように絵本や手遊びなどを取り入れる。
10月	保育者のまねをして、音楽にあわせてからだを動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ		わらべうたや童謡に合わせて楽器を鳴らす楽しさを伝えていく。
11月	手遊びなどでふれ合いながら、保育者のまねをして遊ぶ。		保育者とふれ合う中で、子どもがまねをしたり、やってみようとする気持ちを大切にする。
12月	手遊びやベビーマッサージなどを喜び、保育者をまねしてからだを揺らしたり、手足を動かしたりすることを楽しむ。		保育者の動きをまねして、友だちと一緒にからだを動かすことを楽しめるようにする。
2月	手遊びやふれあい遊びなど、身の回りのことに自ら関わる。		子どもが好きな手遊びや、ふれあい遊びを繰り返し行えるようにかかわり、楽しさを共有する。

表3 保育雑誌B 0歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
4月	歌を聞きながら、特定の保育者とのやりとりをする。		優しい語りかけや、心地よい歌いかけなどをして、発声のやりとりを一緒に楽しめるようにする。	〈ねらい〉 特定の保育者の語りかけや、歌いかけに関心をもつ。
5月	オムツ交換の時など保育者に繰り返し体を伸ばしたり屈伸したりしてもらい、楽しむ。		「おむつ替えようね」と語り掛けながら汚れたおむつを交換し、心地よさに変えていく。またわらべうたやマッサージなどを行い触れ合うことを楽しむ。	〈ねらい〉 足を伸ばしたり、ボタンボタンと動かしたりして心地よさを感じる。 目に見えたものに興味をもち、機嫌よく過ごす。
6月	特定の保育者に寝かしつけてもらい、安心して眠る。		途中で目覚めたときは子守唄を歌ったり抱いたりして、安心して再び眠れるようにする。	
7月	保育者と『だるまさん』や『だいこんおろし』をしながら顔を見合って笑う。	着替えの時など、手足をさすってスキンシップをとったり、わらべうたやふれあい遊びを繰り返し楽しむ。		
10月	特定の保育者と一対一で遊び、安定感を持って過ごす。		一対一で手遊びやわらべうたなどふれあい遊びを十分に楽しめるようにする。	〈ねらい〉 特定の保育者と関わりを深める。
11月	保育者と一緒に、『あたまかたひざポン』などふれあい遊びを楽しむ。		子どもたちが興味を持っているわらべうたやふれあい遊びを繰り返し行い、反応に合わせて保育者も声の調子を変えながら遊ぶ。	
2月	他児や保育者等様々な人がいることに気づき、関わろうとする。 『どこでしょう』の歌を聞いて「…た(いた)！」と指をさしてニッコリと笑う。	遊び歌を歌いかけて、身近な保育者や友だちに関心をもてるようにする。	遊び歌を歌いかけて、他児に気づいたことを「Cちゃんいたね」と言葉にして名前が他児と一致した喜びを共感する。 他児や保育者の顔と名前が一致する喜びを共感する。	〈ねらい〉 身近な人とかかわる心地よさを感じる。

保育雑誌Aの指導計画では、音楽活動に関する9の記述のすべてに他者との関係がみられる記述があった。保育者からの働きかけでの展開が想定されている内容で、これらの活動は乳児保育の3つの視点のうち「身近な人と気持ちが通じ合う（社会的発達の視点）」として記載されていた。「身近なものとの関わり感性が育つ（精神的発達の視点）」の内容も、計画では「保育者のまね」という記述が繰り返されており、やがて表現に結びつく内容だが、ものを介して保育者とのかわりがかかれていく。年間の後半になると、友だちとの関係についての記述が含まれはじめ、子どもの対人関係の広がりが計画の中で明確に述べられるようになってきている。子どもは様々な体験の中で他者との関係を広げていくが、手遊び歌やわらべうたでの体験もその1つであるからこそ、積極的に取り入れたい活動ということだろう。

保育雑誌Bの指導計画は、音楽活動に関する記述のすべてで他者との関係性が見られる内容となっていた。特

定の保育者からの働きかけが想定されている。こちらでも「保育者のまね」をすることが想定されて記載されている。年間の後半になり、『どこでしょう』の歌での、他児など他の人への気付きの促しに関しても書かれており、特定の保育者との関係から、少しずつ他児との関係への発展が図られている。保育雑誌Bでは明記されていないが、「保育者と」で始まる記述であることから、社会的発達の視点が表されている。

どちらの計画においても、保育者からの働きかけに関する内容がしめており、0歳児の指導計画における「音楽に関わる内容」は、他者と1対1での関係づくりに関連した内容となっていることがわかった。

②1歳児の指導計画

1歳児の「他者との関係がみられる記載」について保育雑誌Aを表4、保育雑誌Bを表5に示した。

保育活動での音楽による社会性の育ち

表4 保育雑誌A 1歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
4月	保育士と一緒に、ふれあい遊びや音楽に合わせて身体を動かすことを喜ぶ。	親しんできた体操曲やわらべうたを準備する。	声や音の響きを大切にして、子どもに関わる。また、踊りをまねしながら楽しさを味わえるようにする。
5月	保育士や友だちをまねて、身体を動かしたり、歌ったりすることを楽しむ。	子どもの動作に合わせて動いたり、歌ったりできるようにタイミングを合わせる。	同じ空間で一緒に遊ぶ楽しさに共感しながら、友だちへの関心を広げる。
7月	年上児の踊りをまねしながら、音楽に合わせて体をうごかす。		保育士も一緒に踊ることを楽しみ、楽しさを共有することで、子どもが自分から身体を動かす楽しさを味わえるようにする。
11月	虫や動物などの動きをイメージして手足を動かしたり、寝転んだりして保育士や友だちと遊ぶ。	遊びの中で自然に身体を動かし、やってみたくらいというきもちがわき起こるような歌を歌うなどして楽しい空間をつくる。	子どもたちが楽しんでいる動きを取り入れ、一人ひとりをみてほめていくことで、のびのびと動きを楽しめるようにする。
3月	身近な生活のごっこ遊びを楽しみながら、友だちとの関わりを深めていく。生活や遊びを通して経験したことを、言葉や身体を使って自分なりに表現してみる。	保育士も全身を使って経験したことなどを表現し、言葉・身振り、製作・音楽など、様々な表現方法に触れる機会を作っていく。	ごっこ遊びやわらべうたを楽しむ中で、友だちと関わり合う楽しさを感じられるよう仲立ちをする。表現しようという気持ちをうけとめ、伝わる心地よさを繰り返し経験することで、表現する楽しさや豊かな表現へとつながるようにする。

表5 保育雑誌B 1歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
4月	保育者と一緒に、体を揺らしたり手を叩いたりして楽しむ。	子守唄を歌ったり、オルゴール曲などゆったりとした音色のものを用意したりする。ふれあい遊びの歌や子どもの好きな曲のCDなどを用意し、いつでも流せるようにしておく。	明るく元気に歌いながら一対一での触れ合いを多くし、子どもたちが喜び安心してできるようにする。	〈ねらい〉 (低月齢児) 保育者に親しみ、安心して過ごす。 新しい環境に慣れ、周囲のものに関心をもつ。 (高月齢児) 保育者に見守られながら、園での生活の仕方に慣れる好きなことを見つけて機嫌よく遊ぶ。
5月	保育者や友だちと一緒に、歌ったり身体を動かしたりする。	園庭にこいのぼりを掲げる。	子ども自身のやりたい気持ちを大切にしながら、広い場所でバスごっこやわらべ歌、ふれあい遊びなど、体を使って伸び伸びと遊べるようにしていく。 『こいのぼり』を歌いながら、子どものつぶやきに十分に耳を傾けて思いを共感する。	〈ねらい〉 (低月齢児) 身近な音楽に親しみ、歌おうとしたり身体を動かしたりすることを楽しむ。 保育者と一緒にこいのぼりを見て楽しむ。 保育者と一緒に、わらべうたやリズム遊びを楽しむ。
6月	保育者と一緒にまねっこ遊びを楽しむ。		『くまさんくまさん』の歌に合わせて、片足を上げたり両手を上げたりするなど保育者の動きを大きくわかりやすくして、“まねっこ”を十分に楽しむようにする。	〈ねらい〉 (低月齢児) 安心できる保育者のかかわりのなかで、自分の思いを表そうとする。 (高月齢児) 簡単な身の回りのことを自分でしようとする気持ちが育つ。 身近な玩具や用具を触ったり使ったりして十分に遊ぶ。
10月	手指を使ったり、保育者と一緒に歌ったり、身体を動かしたりして楽しく遊ぶ。音楽に親しみ、体を動かしたり、歌詞の一部を歌ったりして楽しむ。	興味のある玩具や模倣しやすいく・好きな歌を用意しておく。子どもの好きな曲や簡単な振りのあるものを用意しておく。	子どもが好奇心をもって遊ぶ姿に共感し、手や指を使う遊びを保育者と一緒に楽しめるようにする。また、歌詞は明るくはっきり伝わるようにし、リズムに合わせて体を動かす時はメリハリをつけるなど模倣しやすいうようにする。明るい表情や聴きとりやすい声で歌ったり、身振りを大きくしたりして、保育者も一緒に楽しめるようにする。	〈ねらい〉 言葉のやり取りを通して周りの人と心を通わせながら、手指や身体を十分に動かして遊ぶ。

11月	絵本やわらべうたを楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。 気に入った絵本やわらべうたを保育者と一緒に楽しむ。		言葉のユーモアを保育者自身が感じながら絵本を読んだり、わらべうたを歌ったりして、ゆったりとした心地よい時間にしていく。 膝に座らせて子どもの望むままに繰り返し絵本を読んだり、一緒に体を揺らしながらわらべうたを歌ったりして、ゆったりとした心地よい時間にしていく。	〈ねらい〉 手指の感覚を豊かにしたり、感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとしたりする。
12月	保育者や友だちと一緒に歌やリズムに合わせた体の動きを楽しむ。 クリスマス曲に合わせて歌を歌ったり、からだを動かしたりして楽しむ。		保育者も一緒に身近なクリスマス曲を歌ったり、身体を動かしたりし楽しさを共有する。 楽しい雰囲気の中で、手を叩いたり、保育者の動きをまねたりして楽しめるようにする。	〈ねらい〉 思ったことを伝えようとしたり、身近な音楽にあわせて体を動かしたりしながら、保育者や友だちと関わる心地よさを味わう。
3月	保育者や友だちと一緒に見立てやつもり遊びをする中で、簡単な言葉のやり取りを楽しむ。 保育者と一緒に歌ったり、簡単な手遊びをしたりして楽しむ。		手遊び歌は、明るく聴きとりやすい声で歌ったり、子どもにあわせてまねやすいようにしたりしていく。 明るく聴きとりやすい声で歌ったり、手遊びしようとする子どもの動きに合わせてまねしやすいようにするなど、保育者と一緒に楽しんで遊べるようにしていく。	〈ねらい〉 手や指を使う遊びをしたり、身近な音楽を聞いたりして楽しむ。

保育雑誌Aでは、「音楽に関わる内容」は領域「表現」として記載されているが、保育者の働き掛けが大きい中での「表現」活動となっていて、音楽などで表現そのものを楽しむだけでなく、他者との関係の中で活動を行っていくことが記載されている。よって、1歳児の「音楽にかかわる内容」は領域「表現」を目指しながら、他者と活動する上での関係性への媒介と考えることができる。また、環境構成に「やってみたいというきもちがわき起こるような歌を歌うなど楽しい空間を作る」という記載があり、音楽が遊びへの動機づけの一つとして活用されている。

保育雑誌Bは、領域は明記されていないが、領域「表現」の内容と考えられる活動が多く含まれていた。年間の前半の記述には、保育者や他児との関係性に関する記述が多いが、後半になるにつれ少しずつ表現遊びとしてリズム遊びが記載されている。また、11月の記載には「言葉のユーモアを保育者自身が感じながら絵本を読んだり、わらべうたを歌ったりしてゆったりとした心地よい時間にしていく」というように、領域「言葉」の活動と考えられる活動に、わらべうたが用いられていて、音

楽を用いた子どもの興味関心への働きかけが記述されている。同時に、「膝に座らせて子どもの望むままに繰り返し絵本を読んだり、一緒に体を揺らしながらわらべうたを歌ったりして、ゆったりとした心地よい時間にしていく」とあり、保育者が子どもの望むままにに応じていく、つまり、一方的に聞かせるだけでなく、やり取りをしていくことも記載されている。

1歳児の指導計画においては、保育者からの働きかけだけではなく、子ども自身からも言葉や指差しなどの明確で意図的な自分の「こうしたい」という思いや、表現しようとする気持ちを保育者が受け止めて、思いや気持ちが相手に伝わる経験を積み重ねていける配慮が、保育者には求められていることになる。相手に自分の思いや気持ちが伝わることを通して、自分で考え、行動に移していく自立心の基礎ともなっていくと考えられる。

③ 2歳児の指導計画

2歳児の他者との関係がみられる記載について保育雑誌Aを表6、保育雑誌Bを表7に示した。

保育活動での音楽による社会性の育ち

表6 保育雑誌A 2歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
4月	保育士と一緒に親しみのある歌や手遊び、わらべうたを楽しむ。		保育士が楽しみながら歌い、子どもと一緒にやってみたいと思えるようにしていく。
9月	リズム遊びや運動遊びで、表現する楽しさを知る。		作った楽器を使ってリズム遊びを保育士と楽しんだり、曲に合わせて自由に表現できるようにする。子どもとふれ合って遊びながら、リズムに合わせて身体を動かす楽しさを伝える。
12月	曲や歌に合わせて、簡単な身体表現をして楽しむ。		歌ったり踊ったりすることを一緒に楽しむことで、子どもたちが興味を持てるようにする。友だちと一緒にリズムにあわせ身体を動かしながら、表現する楽しさを味わえるようにする。

表7 保育雑誌B 2歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
4月	保育者や友だちと一緒に歌ったり、わらべうた遊びをしたりする。		保育者と一緒の安心感、友だちへの興味・関心をもてるように、ゆったりとした雰囲気の中でふれあい遊びができるようにする。	〈ねらい〉 保育者や友だちと一緒に歌やふれあい遊びを楽しむ。
5月	好きな歌を歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりする。	子どもの知っている曲や身体を動かして楽しめる曲を用意しておく。 さんぽで見つけたものを表現できるように、CDやピアノの曲を用意する。(『つばめになって』『だんごむしたいそう』など)	保育者も一緒に歌ったり、体を動かしたりして、楽しさを伝えていく。	〈ねらい〉 言葉を使って伝えたり、やり取りを楽しんだりする。
6月	保育者や友だちと一緒に体を動かして表現遊びをしたり、曲に合わせてふれあい遊びをしたりする。	楽しく身体を動かせるように、好きな曲やリズムカルな曲を用意しておく。	子どもの様々な表現を受け止め、楽しんで体を動かせるようにする。	〈ねらい〉 保育者や友だちと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。
9月	好きな曲やリズムに合わせて踊ることを楽しむ。		好きな曲のリズムに合わせてからだを動かしたり、掛け声をしたりするなど、保育者や友だちと楽しめるようにする。 曲を流しながら、上下、左右に振ったり、ボールが跳ねる様子を楽しんだりして、保育者も一緒に楽しむ。	〈ねらい〉 歌やリズムに合わせて体を動かすことを楽しむ。
10月	保育者や友だちと歌や手遊びをして遊ぶ。	子どもたちが楽しめる歌や手遊びを用意しておく。	ピアノを弾いたり、歌ったりして一緒に楽しめるようにする。	〈ねらい〉 保育者や友だちと表現活動を楽しむ。
11月	手作り楽器でいろいろな音を鳴らして遊ぶ。(手作りカスタネット)	子どもたちが好きな曲のCDや手作り楽器を用意し、音やリズムを楽しめるコーナーを作っておく。	保育者も一緒に楽器を鳴らして、「こんな音がするよ」「いい音がするね」と、持ち方や鳴らし方を知らせて一緒に楽しむようにする。	〈ねらい〉 保育者や友だちと一緒に遊ぶことを楽しむ。
3月	季節の歌を保育者や友だちと歌う。	季節の歌や子どもたちの好きな歌を、ピアノで弾いたりCDを再生したりする。	ピアノを弾いたり、保育者も歌に合わせて身振り手振りをして歌ったりして、楽しめるようにする。	〈ねらい〉 季節の変化や自然に興味を持ち、戸外遊びを楽しむ。

保育雑誌Aでは子どもの表現を引き出す環境構成や援助と配慮に関する記述が増え、個々の子どもと保育者のやり取りだけではなく、音楽を通して子どもが表現する姿を引き出している。また、9月の指導計画の中に季節の素材を使った手作り楽器の作り方や、一緒に取り組みたい歌が紹介された囲みがある。内容の「リズム遊びや

運動遊びで、表現する楽しさを知る」に関連して手作り楽器を使用することが援助と配慮に書かれており、造形や身体表現と関連して、手遊びや歌が取り入れられている。また、12月では音楽による表現を「友だちと一緒に」体験できるように、援助と配慮で記載されている。

保育雑誌Bでは4月の「音楽にかかわる活動」が、

「保育者や友だちと一緒に歌ったり、わらべうた遊びをしたりする」とあり、これに対応する「援助と配慮」は「保育者と一緒にの安心感、友だちへの興味・関心をもてるようにゆったりとした雰囲気の中でふれ合い遊びができるようにする」とある。新しい環境に慣れ、対人関係を築いていくことが目指される内容であり、他者との関係が書かれているととらえることができる。その後は「音楽に関わる内容」としては、領域「表現」に関わっているが、それを友だちや保育者と一緒にやっていくことが「援助と配慮」において記載されている。

2歳児では、ねらいや「音楽に関わる内容」において、保育者と個別の対応よりも、保育者を仲立ちとして「友だちと一緒に」に活動することが、いずれにおいても共通している。年度初めである4月5月では、保育者との信頼関係を築いていくことが大切である。その信頼関係を基軸に、対人関係の広がりや友だちのしているこ

とに興味を持つような働きかけや、子ども同士で興味を示しあっていることを保育者が気付き受け止め、さらに関係が深まるように働きかけることが求められるということだろう。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の、満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関するねらい及び内容の領域「人間関係」の内容において、「保育教諭等の仲立ちにより、他の園児との関わり方を少しずつ身につける」ことが記載されている。2歳児の指導計画では、このことが達成される時期であるので、音楽でのかわりにおいても他児への気付きや興味を持てる関わりに配慮する保育が求められると言える。

④3歳児の指導計画

3歳児の他者との関係がみられる記載について保育雑誌Aを表8、保育雑誌Bを表9に示した。

表8 保育雑誌A 3歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
7月	保育者や友だちと一緒に過ごす喜びを知る。	わらべうたを歌いながら、クラスで楽しめるようにする。	わらべ歌を繰り返し遊ぶなかで、友だちと関わって遊ぶ経験をする。
11月	友だちと一緒にの歌を歌ったり、リズム打ちを楽しんだりする。	親しみやすい歌や楽器を用意する。他のクラスに見てもらおう機会をもつ。	友だちと歌ったり、楽器を鳴らしたりする楽しさを感じられるようにする。
12月	劇・歌・リズム奏などを大勢の前で発表する。	楽しみながら発表できるように、他クラスの前で発表する機会をもち、自信をつける。	個別に関わり、言葉がけしながら自信につなげていく。

表9 保育雑誌B 3歳児の他者との関係がみられる載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
4月	(保) みんなで一緒に季節の歌を歌ったり手遊びしたりする。 (幼) 保育者と一緒に歌を歌ったり、絵本をみたりする。	(幼) 降園の前に親しみやすい手遊びをしたり、絵本や紙芝居を見たりして、園で友だちと過ごす時間や、保育者のすることが楽しいという気持ちを持てるようにする。 親しみのある音楽を流してみんなで踊る機会をつくり、保育者がすることに興味をもったり、園生活の楽しさを感じたりできるようにする。		〈ねらい〉 (保) 身近な春の自然にふれ、親しむ。 (幼) 好きな遊具や用具、場所を見つけて遊ぶ。
5月	(幼) 保育者や友だちと一緒に手遊びをしたり、身体を動かしたりする。			
9月	保育者と一緒に歌ったり、リズムにあわせて踊ったりとからだを動かして表現する。		保育者も一緒になって、みんなで身体を動かす楽しさを伝えていながら、身体を動かす遊びに入りたがらない子どもには、友だちの様子をみて興味を示した時に仲間に入れるように声をかけていく。	〈ねらい〉 保育者や友だちと一緒に体を十分に動かすことを十分に楽しむ。
10月	保育者や友だちと一緒にリズムにのって踊ったり巧技台で身体を動かしたりして遊ぶ。		運動会で自分なりに表現したり体を動かしたりして参加できるように保育者も楽しい雰囲気に参加する。	〈ねらい〉 保育者や友だちと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。
2月	歌声や楽器の音が友だちとそろって心地よさを感じる。			

保育雑誌Aには、12月の計画で行事に関連する形で領域「表現」の内容が書かれている。行事に向かって、前の月から連続して活動が行われ、他のクラスの前で発表する機会につながっていく。発表を通し、「楽しみながら、他クラスの前で発表する機会をもち自信をつける」ことや、「個別にかかわり、言葉がけをしながら自信につなげていく」ということを目指している。これは3歳以上の領域「人間関係」の内容の取扱いにある「一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、園児が自己を発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること」に結びつくと考えられる。他のクラスの前で発表するという表現活動も、領域「人間関係」で述べられている他者から認められる体験や、自分の良さや特徴に気づいていく体験を支える活動の一つとみることができる。

保育雑誌Bでは、4月、5月は園生活に慣れることや、新しい対人関係に慣れていく時期で、歌や手あそびなどの音楽活動も関係を結ぶ体験として書かれているととらえられる。それ以降では領域「表現」の内容であるが、9月の「援助と配慮」に注目したい。この時期は運動会に向かっての活動が盛んにおこなわれる時期であり、リズムに合わせて身体を動かしたり踊ったりという

活動が書かれているが「援助と配慮」において、「身体を動かす遊びに入りたがらない子どもには、友だちの様子をみて興味を示した時に仲間に入れるように声をかけていく」と記載がある。一人ひとりの子どもの表現方法の違いを認めながら、他者の姿を通して興味関心の幅を広げることへの働きかけであると同時に、保育雑誌Aでの他のクラスの前での発表とは違う形ではあるが「一人ひとりを生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること」と結びついていることが考えられる。

3歳児の指導計画では、領域「表現」でありながらも、2歳までで育まれてきた他児への気づきをもとに、個と個だけではなく、個と集団での関係が含まれ、活動の中で自分と集団の他者との関係への気づきを促す活動が記載されている。保育者は幅広い活動の中から、一人ひとりの子どもを理解することが求められているが、領域「表現」の活動の中からも、子ども同士に起きることが想定される個と個の関係から、個と集団の関係へと発展する、社会性の育ちの変化を敏感にとらえる必要があると言える。

⑤4歳児の指導計画

4歳児の他者との関係がみられる記載について保育雑誌Aを表10、保育雑誌Bを表11に示した。

表10 保育雑誌A 4歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
4月	保育者や友だちと一緒に楽しく歌ったり踊ったりする。		
5月	保育者や友だちと季節の歌を歌ったり、季節の絵本・図鑑を読み合ったりする。	ゲームや歌遊びを通して、小グループや二人組になる機会などもうけ、様々な友だちと関わる場ができるようにする。	友だちとの関係やもめごとなどをていねいに見守り、「一人ひとりの”人とかかわる力”がどう育まれているか」という視点から、仲立ちをしたり、助言したりする。
8月	友だちと一緒に歌ったり、リズム遊びをしたりして楽しむ。	フラフープなどの子どもたちが関心を示している遊具をリズム遊びに取り入れ、より楽しめるようにする。	
9月	音楽に合わせて表現することを喜び、集団で合わせて踊ることを楽しむ。	子どもたちが好きな曲を選択し、みんなでのびのびと動けるスペースを確保する。	みんなで踊ることを全身で楽しみながらも、集団で動くことの面白さも伝えていく。
12月	リズムに合わせて歌ったり、身体を動かしたりすることや、楽器を鳴らすことを楽しむ。	さまざまな楽器の音色を味わい、リズムを感じて合奏することを楽しむ。	他のクラスの子どもや保育者に、自分達の合奏を聞いてもらう機会を設けるなど、自信をもてるようにする。
1月	友だちと一緒に歌ったり踊ったり、楽器を弾いたりして音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。		
2月	友だちと一緒に歌ったり、様々な楽器で合奏したりすることで、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。	いろいろな楽器を準備して子どもたちの興味を引き出していく。また、事前に楽器の取扱いや約束事を伝え、子どもたちが自分で楽器を出し入れできるような環境づくりをする。	友だちと一緒に歌ったり合奏したりして、一人ひとりが自分なりの表現をする姿を受け止め、自信につなげていく。
3月	お別れ会や卒園式に向けて、プレゼントづくりやお祝いの歌の練習などを行い、感謝の気持ちをもつ。	子どもたちから年長児との楽しかった思い出を聞き、その中からお祝いの言葉を考えて練習を行うようにする。	年長児との思い出を振り返りながら、友だちと一緒にお別れ会や卒園式の用意をして、感謝の気持ちをもてるようにする。

表11 保育雑誌B 4歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
4月	クラスのみみんなで、絵本や紙芝居、歌、わらべうたなどを楽しむ。	身近な内容で親しみやすい絵本、歌、わらべうたなどを取り入れて、みんなで動きや声を合わせたり、ふれあったりするおもしろさを共有しながら、保育者やクラスの友だちと過ごす楽しさを感じられるようにする。		〈ねらい〉 自分の好きな遊びや、保育者や友だちと遊びを楽しむ。
5月	保育者や友だちと園庭で体操や鬼ごっこなどをして、体を動かして遊ぶ心地よさを味わう。	体操やダンスが楽しめるように音源や機器を準備する、ボールや乗り物は並べて置くなどして、好きな遊びが見つげられるようにする。 絵本や図鑑、歌や手遊びを準備し、話を聞く、友だちと図鑑を見る、リズムに合わせて歌うことを楽しめるようにする。		〈ねらい〉 保育者や友だちと好きな遊びを十分に楽しむ。
6月	友だちと楽しんで歌をうたったり、音楽に合わせてからだを動かしたりして遊ぶ。	子どもの動きや音に合わせて保育者がピアノを弾き、友だちと歌を歌う、楽器を鳴らすなどの楽しさを味わえるようにする。		〈ねらい〉 友だちと関わりながら、好きな遊びを楽しむ。
7月	保育者や友だちと音楽に合わせて、思いきり体を動かして体操をしたり、夏の歌を楽しんで歌ったりする。			〈ねらい〉 自分なりの思いを表現しながら、保育者や友だちと遊ぶことを楽しむ。
9月	友だちと歌ったり音楽に合わせて体を動かしたりして遊ぶ。		体を動かす楽しさや心地よさが味わえるように、保育者自身が子どもと思いきりからだを動かして、様々な体の動きを取り入れて遊ぶ。	〈ねらい〉 生活のリズムを整え、友だちと十分に身体を動かして遊ぶ。
10月	音楽に合わせて、友だちや異年齢児と動いたり踊ったりしてリズムに親しむ。	自分たちで好きな時に音楽を流して、リズムや表現を楽しむようにCDプレイヤーを置く場所を決めて、操作しやすいように印をつけておく。	異年齢児と一緒に踊ったり歌ったりして自然な形で交流ができるように保育者間で連携をし、場の構成を行う。	〈ねらい〉 友だちと身体を伸び伸びと動かして遊ぶ心地良さや楽しさを味わう。
3月	友だちと気持ちを合わせて歌を歌ったり、トーンチャイムを演奏したりする。	曲を録音したCDや楽器を手の届くところに用意しておき、やりたいときにトーンチャイムの演奏ができるようにする。		〈ねらい〉 保育者や友だちと意思を合わせ、意欲的に遊ぶ。

保育雑誌Aでは領域「表現」の内容として書かれているが、ほとんどの活動に「友だちと」や「みんなで」ということが記述されており、それらは子ども達が共通の目的に向かって行動する活動だと考えられる。5月の活動では、領域「人間関係」の活動として、音楽を媒介として小グループや2人組などを組む活動が設定されている。仲のいい友だちや、それまで知っている関係にある子ども同士での遊びだけでなく、新たな対人関係の拡大のきっかけを音楽活動でも取り入れているということである。また、12月の活動の中で、領域「表現」として設定されている活動において、他のクラスの子どもや保育者に聞いてもらう機会を作ることによって、子ども自身が表現することに自信をもてるようにすることが「援助と配慮」において述べられており、他者との関係がみられる活動であると考えられる。そして、3月の活動では、年

長児のお別れ会でのお祝いの歌の練習も計画されている。この活動に対して「援助と配慮」では、「年長児との思い出を振り返りながら、友だちと一緒に別れ会や卒園式の用意をして、感謝の気持ちを持てるようにする」とある。子どもが主体となって活動に向かっていくように働きかけ、子ども達が、共通の目的を見いだしていくという自信につながっていくと考えられる。

保育雑誌Bでは、4月には「クラスのみみんなで絵本や紙芝居、歌、わらべうたなどを楽しむ」とある。新しいクラスでの対人関係の媒介としての音楽ととらえることができ、こちらも他者との関係がみられる記載である。また、10月には運動会の行事と関連して「音楽に合わせて、友だちや異年齢児と動いたり踊ったりしてリズムに親しむ」ということが「援助と配慮」にあり、他

保育活動での音楽による社会性の育ち

者との関係に充分に働きかけていると言える。「友だち」と「みんなで」ということが書かれており、自分の行っている行動は、自分一人や保育者とだけ行っているのではなく、様々な友だちとも関わって行動が成り立っていることへの気付きの促しにつなげていきたいものであることがわかる。また、年度の終盤では、「自分たちで好きな時に音楽を流して、リズムや表現を楽しめるようにCDプレイヤーを置く場所を決めて、操作しやすいように印をつけておく」等の記載があり、これは、子ども達がそれまでに経験した音楽やリズム遊びを主体的に選び、遊びに活かすことができる力を育んでいこうとい

う、保育の中での援助の一つととらえることができる。

双方の指導計画にわたり、「音楽に関わる内容」は、領域「表現」の活動を友だちと共に取り組んでいくことが記載されているが、子どもの行動や活動は個別に単独で行うものではなく、他者と関係しあう中で様々な展開され、その活動の一つとして音楽も使われている。

⑥5歳児の指導計画

5歳児の他者との関係がみられる記載について保育雑誌Aを表12、保育雑誌Bを表13に示した。

表12 保育雑誌A 5歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮
4月	保育者や友だちと一緒に楽しく歌ったり、踊ったりする。	前年度まで親しんできた曲や、仲間づくりを楽しめるような曲を用意する。	一緒に歌ったり、手遊びをしたりして楽しむ。
5月	保育者や友だちと一緒に楽しく歌ったり、身体を動かしたりして楽しむ。	バス旅行で一緒に歌える親しみやすい曲・季節の曲を準備する。	一緒に楽しく歌ったり、踊ったり、手遊びをしながら楽しさを伝えていく。
6月	様々な音・形・色・手触り・動きなどを気づいたりみつけたり、身体で表現したりして楽しむ。	子どもたちが好きな親しみやすい曲、季節の曲をいつでも流せるように準備する。	楽しく歌ったり、身体を動かしたりしながら、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうようにする。
7月	友だちと一緒に歌ったり、リズムに乗って踊ったりすることを楽しむ。	季節の歌や 子どもたちが好む曲を選び、いつでも流せるようにしておく。	楽しく歌ったり、踊ったり、みんなで一緒に表現する楽しさを感じるようにする。
8月	友だちと一緒に歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたり、表現したりする。		
10月	友だちと一緒にいろいろな曲に合わせて歌ったり、身体を動かしたりして楽しむ。		一緒に歌ったり、身体を動かしたりしながら楽しさを共有し合い、子どもの自由な表現を受け止め、楽しめるようにする。
11月	友だちと一緒に歌ったり踊ったり、楽器を弾いたりして、リズムの楽しさを味わう。	楽しく表現できるような親しみのある曲やリズムカルな曲などを選んで用意しておく。	
12月	様々な音色やリズムの違いを知り、みんなと一緒に合奏したり曲に合わせて踊ったりして楽しむ。	生活発表会に使う曲や季節に合わせた親しみやすい曲を選んでおき、いつでも歌ったり踊ったり、リズム遊びができるようにする。	自由に楽器を鳴らしたり、歌ったり、リズムに乗ったりして一緒に楽しんでいく。
1月	友だちと一緒に歌ったり、リズムに合わせて身体を動かしたりして楽しむ。	季節の歌を用意したり、一緒に歌ったりしながら、伝承遊びのやり方を伝える。	子どもと一緒に歌ったり、踊ったりしながら表現する楽しさを味わうようにする。

表13 保育雑誌B 5歳児の他者との関係がみられる記載内容

	音楽に関わる内容	環境構成	援助と配慮	備考
5月	歌やリズムに合わせて体を動かすことを楽しむ。			〈ねらい〉 友だちと一緒に戸外で遊び、体を動かす心地よさや開放感を味わう。
9月	音楽やリズム、イメージに合わせて、体を様々な動かしながら表現する面白さを味わう。		運動会について話し合う機会をもち、自分たちのやりたい競技・演技や役割を挙げたり、日頃楽しんでいることを内容に生かしたりして、それぞれが力を出し、みんなで協力して取り組む意欲をもてるようにしていく。	〈ねらい〉 様々な運動あそびに取り組み、十分に身体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。

10月		運動会後も用具や衣装、CDプレーヤーを使いやすいように置いたり年下の子もたちと関わる機会を作ったりして、再現して自分たちで遊びを進めて行く楽しさを味わう。		〈ねらい〉 共通の目的に向かって友だちと協力して遊びや生活を進める楽しさを味わう。
2月	リズムに合わせる楽しさや、気持ちをあわせて歌う心地よさを感じる。	活動を振り返る機会を作り、グループでの取り組みをクラス全体で共有していく。また、友だちと役割を分担しながら活動を進める充実感や次の意欲につながるようにする。		〈ねらい〉 共通の目的に向かって友だちと考えを出し合いながら協力し、表現する楽しさを味わう。

保育雑誌Aでは、毎月「音楽に関わる内容」が含まれていた。そのうち領域「表現」として書かれているが、友だちと行うことが想定されている活動が9つある。4月の計画の中で、環境構成に「仲間づくりを楽しめるような曲を用意する」と書かれている。仲のいい子や、これまで同じクラスになったことのある子だけでなく、さらに友だちの関係を広げたり、相手を深く知っていくことのできる環境を目指しているものと考えられる。また、保育雑誌Bの4歳児の計画にあったような、6月以降の環境設定には「好きな曲を選び流せるようにしておく」や「運動会で使った曲や親しみのある曲を流せるようにしておく」という記載もある。他者との関係の中で、子どもが自分たちで音楽を用いることができるようにされているのである。

保育雑誌Bの方でも、「音楽に関わる内容」に対応している「ねらい」は「友だちと」とあり、子ども達の主体的な活動の中で、音楽を選択できるようになっていると言える。

5歳児となると音楽に限らず、様々な場面で友だちと共に楽しんだり、協力したりすることを子ども達自身で主体的に行える力が身につけてきていることが想定される。音楽での表現を一緒に行うことも、領域「人間関係」の内容にある「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」ことや、「友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」ことに結びついていくだろう。保育者は領域「表現」として表現力にだけ注目するのではなく、子どもが相手の表現の思いに互いに気付き合い、良さを認め合えるような援助が求められていると言える。

Ⅲ. 総合考察—子どもの音楽活動と社会性の育ち

2誌の月間指導計画に共通することをまとめると、以下ようになる。0歳児では手遊び歌やわらべうたなどは保育者との関わりを深めていくものであり、応答的・

受容的なかかわりの媒介になると結論付けられる。1歳、2歳と幼児期の前半に渡って、個々の子どもと保育者の関係から周囲の子どもや様々な人に対する気付きや、親しみの感情が育まれる経験の媒介として、音楽活動が機能すると期待できるだろう。そして、3歳児、4歳児、5歳児では新しいクラスのスタートにおいて、音楽活動が取り入れられている。それを土台として、クラスで安定した保育者や他児との関係を作り、音楽活動は領域「表現」の内容としてだけではなく、他の4つの領域や行事とも関連していると読み取れる。また、異年齢交流でも音楽活動が存在し、音楽が他者との関係づくりに活用されているということだろう。未満児の音楽表現について小山(2004)は表現しようとするときの子どもの表情や出している声の抑揚、身体の動き等、あらゆる変化や過程を総合的にとらえていく必要があると述べ、領域「表現」はある一側面だけにとらわれず、子どもを総合的にとらえていくことが必要であり、身近な大人がそれをしっかりと受け止めて、丁寧に応じていくことは、表現する力を育成するだけでなく、コミュニケーション力の基盤を築いていく手段となることを明らかにしている。この視点からも、指導計画の記載内容がある一つの領域の活動の一部であっても、他者との関係をもつ中に音楽が登場しているということがわかる。

入園当初の乳児が保育者と出会う中で反応は、身体運動による反応が中心である。指導計画の中では、月を追うごとに保育者の歌いかけや手遊び歌に対して、してもらうことを喜ぶことや歌に合わせて身体を揺らすこと、動作をまねることなどの反応が予想されると記載されている。1歳児や2歳児でも、保育者の働きかけに楽しさや安心を感じられるように働きかけられ、また、友だちや年上の子どもの動きをまねたり歌ったりする姿が指導計画では予想されている。予想される姿が、実際に子どもから見てとれるのは、子どもと保育者の間に「安定した関係」が築かれていくことが前提となる。他者からの関わりに「喜びや期待」を子どもが持つるよ

うに、様々な活動が繰り返される一部として音楽活動があり、そのことが指導計画で繰り返し記載されているのである。

さらに、「自分なりの表現」を引き出すことも指導計画には記載されていて、これは表現が他者から認められる経験や、友だちとの共有という経験によって成り立っていく。乳児期から幼児期前半では、保育者が音楽活動を提供しているが、それに対する子どもからの反応と保育者の双方向のやりとりとなり、他児との関係へとつながっていく。保育者からの多様な音楽活動の提供を土台とし、幼児期後半となれば音楽は、仲間とともに自分たちの中に取り込み、表現方法の一つとして使っていくものになる。音楽が、仲間と共有され、一緒に行うものへと発展していく。このことを石川（2020）は、幼児の遊びの場面で表れる歌についての事例から、歌にはシンボル性があり、歌の一節のみを歌うことによって全体の

シンボルとなって容易にその全貌が全員に共有され、理解されると述べている。この中で育まれていくのが「互いの思いに気付き合う」ことや「友だちの良さに気付く」ことだろう。そこでの保育者の働きかけは直接的なものから、間接的な環境構成や援助へと変化していくと指導計画からはまとめられる。子どもの社会性は保育者に依存した1対1の関係から、年齢を追うごとにより複数の人との関わりへと発展し、自分達で築くものへと広がり多様な対人関係へと厚みを増していくことが読み取れる。0歳から5歳までの指導計画から読み取ることのできた人との関わりを中心とし、「保育における音楽による社会性の育ち」について筆者の考えを図1に示した。横軸は指導計画における発達段階の区分、縦軸は対人関係の深まり、1対1から複数の関係への広がりを表している。

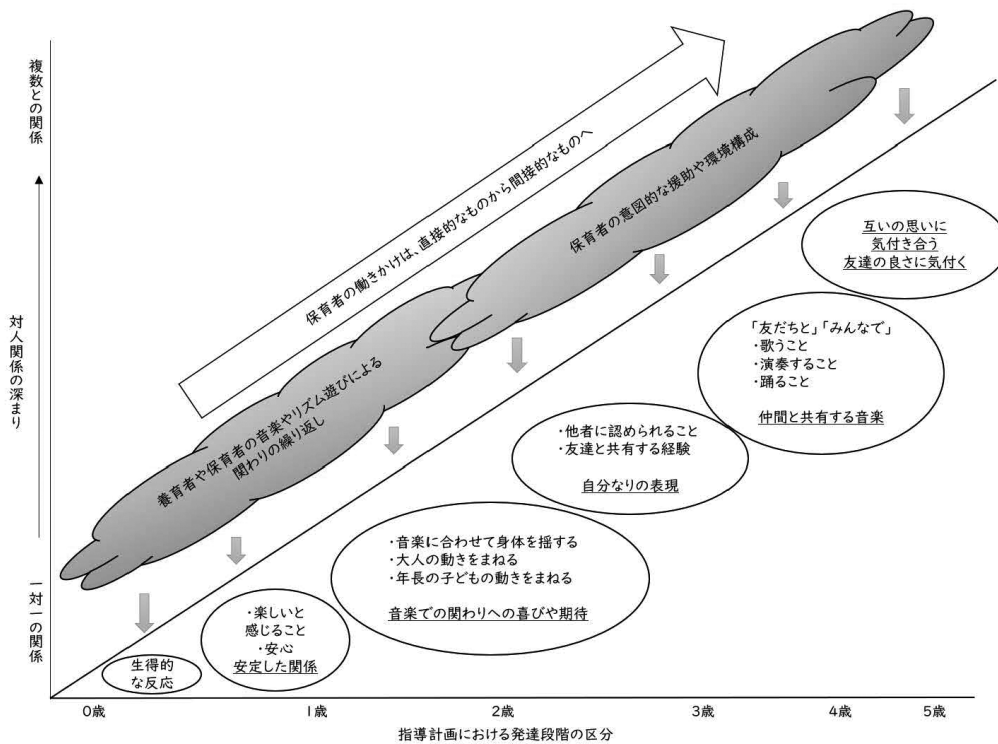


図1 保育における音楽による社会性の育ち

「音楽に関する内容」は、音楽で何かできるようにする姿だけでなく、他者との関わりの姿を予想して立てるべきものと保育者は再認識しなければならない。3つの法令の各領域が目指すことをふまえ、2誌の保育雑誌に掲載されている指導計画の「音楽の関わる内容」には、領域「表現」で達成されるべきことと同時に、保育者や、保育者を仲立ちとした友だちとの関係、子ども

達同士で結ばれていく友だちとの関係へ働きかけている、他者との関わりが内在されたものだというのである。しかし、保育者の音楽に対する意識としては苦手意識や、「保育活動前の導入」である実態が伊藤（2019）、若谷（2018）、笠井ら（2015）から指摘されている。また、一つ一つの歌や手遊び歌はわずかの時間の活動である。その中で仲間と、どんな関係性の中で活動し、どん

な関係性に発展していくことが活動のプラスとなるのか明確に想定し、音楽活動を通して社会性の発達に働きかけることに意識を向ける必要がある。Kirschner (2009) や Cirelli (2014, 2018) が明らかにしたように、音楽での同期を体験した相手に向社会的行動を向けるのであれば、音楽活動での体験に、よりよく協力して取り組む姿にも関連するはずである。この可能性をふまえ指導計画の立案や、実際の保育を行っていくことが重要である。

本研究においては、保育雑誌に掲載された指導計画を取り上げ、その内容から音楽が子どもたちのどのような体験に関わるものかについて検討を行った。今後は、実際に保育現場で運用されている指導計画と、運用している保育者の意識についての検討が課題である。立案した指導計画をもとに、子ども達の行動を保育者はどのように読み解くのか、その視点の在り方を明らかにした上で、音楽活動を通じた社会性の育ちへの援助や配慮が明確に取り扱われる必要があるだろう。

乳幼児期は、生涯にわたる社会性の基盤を生活や遊びの体験をとおして育む時期である。また学齢期になれば、単に学習に取り組めることだけが目的ではなく、他者と複雑に協働する力の向上が望まれる。生涯にわたり社会性、対人関係の中で暮らし、学び、働いていく基盤を育むもののひとつとして、音楽活動の在り方を見ていく必要があるだろう。

注1) 保育における音楽活動は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等の主に領域「表現」において「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」ことや、「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」とあるように、演奏の上達を目指す音楽のレッスンではなく、また歌うことや楽器を演奏することだけにとどまらないものである。それは、あいさつや生活習慣に関わる歌や、季節や空想物語の歌、手遊び、音楽を伴った体操やダンス、また、個々の関わりの中でわらべうた遊びのようなりズム遊びや音楽遊びといった多岐にわたるもので、これらを本研究においては音楽活動とする。

文献

- Cirelli, L. K, Wan., S.J, & Trainor, L.J. (2014). Fourteen-month-old infants use interpersonal synchrony as a cue to direct helpfulness. *Phil. Trans. R. Soc. B* 369, 1-8.
- Cirelli, L. K, Wan., S.J, & Trainor, L.J. (2018). Rhythm and melody associal signals for infants. *Annals of The New York Academy of Sciences*, 1423, 66-72.
- 月刊保育とカリキュラム編集委員 (編) (2019). *月刊保育とカリキュラム 4月号～12月号*. ひかりのくに.

- 月刊保育とカリキュラム編集委員 (編) (2020). *月刊保育とカリキュラム 1月号～3月号*. ひかりのくに.
- 伊藤仁美 (2019). 保育者はどのように「リズム遊び」を捉えているのか. *国立音楽大学研究紀要*, 53, 223-227.
- 石川眞佐江 (2020). 幼児の生きる文脈と歌. 今川恭子 (編著). 私たちに音楽がある理由 *音楽性の学際的探究* (pp. 274-288). 東京: 音楽之友社.
- 笠井キミ子・久原広幸・坂田万代・横山浩平 (2015). 保育教育における手遊び歌についての一考察. *中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要*, 47, 1-11.
- Kirschner, S, & Tomsello, M. (2009). Joint drumming: Social context facilitates synchronization in preschool children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 102, 299-314.
- 小池美知子 (2009). 保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響. *保育学研究*, 47, 60-69.
- 小嶋康裕 (編) (2019). *保育の友増刊号私たちの指導計画 2019 0・1・2歳児*. 社会福祉法人全国社会福祉協議会.
- 小嶋康裕 (編) (2019). *保育の友増刊号私たちの指導計画 2019 3・4・5歳児*. 社会福祉法人全国社会福祉協議会.
- 小山朝子 (2004). 乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現—未満児の事例を通しての考察—. *保育学研究*, 42, 25-34.
- 前田真由美 (2004). 子どもの音楽表現とその意味—一年長児クラスでの実践の分析を通して—. *音楽教育実践ジャーナル*, 1, 52-58.
- 内閣府 (2017). *幼保連携型認定こども園教育・保育要領*.
- 岡田泰子 (2019). 子どもの表現を導く音楽指導について—4歳児を対象としたリズム活動の一考察—. *中京学院大学・中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究*, 5, 135-143.
- 茂野仁美 (2019). 乳幼児保育におけるリズムへの同期の発達過程に関する文献研究. *大阪総合保育大学紀要*, 14, 85-96.
- 白石昌子 (2006). 乳幼児の発達と音楽の関係—音楽の機能が及ぼす影響についての検討を通して—. *人間発達文化学論集*, 3, 12-25.
- Trehub, S, E. (2019). Nurturing infants with music. *International Journal of Music in Early Childhood*, 14, 9-15.
- 山下世史佳・虫明眞砂子 (2019). 幼児期の音楽表現における歌唱の役割. *岡山大学教師教育開発センター紀要*, 9, 109-123.
- 若谷啓子 (2018). 保育における音楽についての一考察 (3) —保育者の手遊びについての意識調査をもとに—. *学校音楽教育実践論集*, 2, 149-150.

謝辞

本論文を作成するにあたり、御指導いただきました大阪総合保育大学大学院 小椋たみ子 教授、並びに、匿名査読者の先生方から貴重なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

なお、利益相反に関する開示事項はありません。

Fostering Sociability Through Musical Activities in Childcare

: Analysis of an Instructional Plan Published in a Childcare Magazine

Hitomi Shigeno

Osaka University of Comprehensive children Education Graduate School

In many studies in recently years, it has become clear that musical activities contribute to the active control of bodily movement and the development of relationships with others through these responses, rather than simply expressing themselves through singing and dancing. In this study, we focused on music activities from "instructional plans" published in childcare magazines, extracting the content of activities proposed and assumed to be "music-related activities" and discussing the content of activities in which relationships with others are found. In infancy and early childhood, the caregiver provides musical activities, which are a interaction between the child's response to them and the caregiver, leading to a relationship with other children. In late childhood, musical activities develop as something shared and done together by peers, fostering "awareness of each other's thoughts" and " awareness of the goodness of friends". Therefore, the caregiver's approach changes from direct to indirect environmental structure and assistance. From the content of the instructional plan, it was possible to read that children's social skills expanded from being dependent on their caregivers to building their own social skills.

Key words : music activities, social development, childcare, instructional planning